



Isaac Albéniz

イサーク・アルベニス 作曲家 1860年5月29日 - 1909年5月18日

1860年5月29日、スペイン北東部カタルーニャ地方 カンブロンに生まれる。
スペイン近代民族主義楽派の旗手となって活躍した作曲家で、天才的なピアニスト。

1868年～1871年にマドリッド音楽院でソルフェージュとピアノを学び、ライブツィヒの音楽院で短期間学んだ後、1876年にブリュッセル王立音楽院で学ぶ。1880年にブダペストに赴いてフランツ・リストに師事しようとしたが、当時リストはヴァイマルにいたため会えなかった。1883年、教師で作曲家のフェリペ・ペドレルに会い、『スペイン組曲 作品47』などのスペイン音楽の作曲を勧められる。

結婚を機に放浪を止めたアルベニスは、マドリッド、ロンドンを経て居をパリに移し、生涯をフランスで過ごす。パリではショソン、フォーレ、デュカス、ダンディと交流し、その音楽的な影響は多くの作品に反映された。スコラ・カンツルムで教えたこともあり、その弟子にはセヴラックがいる。

1900年、腎臓病(当時のブライト病)を患い、ピアノ曲の作曲に戻った。1905年から1909年の間に、最も良く知られた作品である、ピアノによる印象を描いた12曲からなる「イベリア」を書いた。

1909年、フランスのピレネー山中のカンボ・レ・バンで腎疾患のため亡くなり、バルセロナのモンジュイック墓地に埋葬された



Tomonori OZEKI

尾関 友徳 ピアニスト 1988年3月3日 -

菊里高等学校音楽科・東京音楽大学を卒業の後、2010年にフランスへと留学し、パリエコールノルマル、パリ地方音楽院にて研鑽を積む。
その後、ベルギーのブリュッセル王立音楽院(CRB) 修士課程へと進み、優秀賞付きで同課程を修了する。2015年からはブリュッセル王立音楽院(KCB)に籍を置いて古楽的なアプローチを学び、バロック・古典時代から息づく伝統の奏法をモダン演奏に活かす研究を続けた。

現在は日本国内のみならず、海外でのソロリサイタルを開催しており好評を博すほか、仏語による海外招聘講師のピアノレッスン通訳、録音技師としてのCD製作、演奏会やコンクールの収録を担当するなど、音楽家としての活動を多方面に広げている。

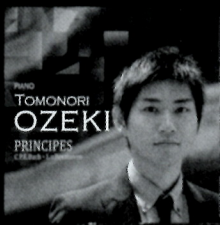
これまでに、在ベルギー日本大使館の大使公邸にて招待演奏をする他、マラガ国際音楽祭やニース国際音楽祭等、多くの国際音楽祭に参加しコンサートを行っている。室内楽においても、ベルギーラジオ局RTBF主催のMusiq 3音楽フェスティバルへの参加をはじめ、多数の演奏を務める。

ビート・クイケン、ヨハン・シュミット、ビリー・エイディ、イヴ・アンリの各氏に師事。



〒100-0006
東京都千代田区有楽町1丁目5-1 日比谷マリンビル B1

アクセス
東京メトロ日比谷線 日比谷駅 A9出口 直結
JR山手線 有楽町駅 日比谷口 徒歩 5分



バロック期から古典派へ。時代の過渡期に活躍したC.P.E.バッハのギャラント様式による端正な作品と、その影響を強く受けながら、自身のスタイルの確立を目指すベートーヴェンの初期の作品。
両者から共通項を見出しながらも、様式も楽器も大きく変化していく時代を見据え、その特色を生かす中で豊かな表現を聴かせています。ロマン派の作品のように大きく歌うのではなく、あくまでも切れ味の鋭いタッチで作品を克明に描き出していくことで、ムダのない引き締まった音楽を生み出した。

1853年出版の「詩的で宗教的な調べ」第3番と、祈りの鐘として全ての人々に捧げる「ラ・カンパネラ(鐘)」をはじめF.Lisztの作品5作を収録したアルバム。
未知の感染症による厄災から、立ち上がろうとする人達へ届ける音楽を。すべての自分と向き合う人々へ祝福を。いつも希望を忘れぬように。表題の「孤独の中の神の祝福」を中心として、穏やかな祈りを捧げる一枚。

